私の人生手帖

春風秋雨

知の荒野に立たぬために

草柳大蔵

Daizo Kusayanagi

海竜社

私の人生手帖

春風秋雨

知の荒野に立たぬために

草柳大蔵

Daizo Kusayanagi

海竜社

〈著者紹介〉
草柳大蔵（くさやなぎ　だいぞう）
1924年神奈川県生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。雑誌編集者，新聞記者を経て執筆活動に入り，ルポルタージュに新生面をきりひらく。評論，人物論，女性論，芸術論とマスコミ界で多彩な活動を続けている。著書に『実力者の条件』『実録満鉄調査部』『美しく生きるとき』『あなたの死にがいは何ですか？』『これが私のお経です』等多数。

知の荒野に立たぬために
私の人生手帖　春風秋雨

平成八年十二月二十三日　第一刷発行

著　者　草柳大蔵

発行者　下村のぶ子
発行所　株式会社　海竜社
東京都中央区築地二ノ十四ノ一（郵便番号）一〇四
電話　東京（〇三）三五四二―九六七一
郵便振替口座＝〇〇一一〇―九―四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所　白陽舎印刷工業株式会社（三三）
製本所　大口製本印刷株式会社

© 1996, Daizoh Kusayanagi, Printed in Japan

ISBN4-7593-0488-6

私の人生手帖　春風秋雨

知の荒野に
立たぬために

——目次

はしがき――5

第1章　自分で編んだ人生教科書

人生、もみじの如く――10

人生は「いちにとさん」で始まる――18

自分で編んだ人生読本――27

心のモノサシ　話のモノサシ――31

第2章　「豊かさ論」を考えるための参考意見

豊かさをつくる心の働かせ方――38

「豊かさ」への警告――48

第3章　固定観念は「知の荒野」をつくる

固定観念を捨てなさい――58

定見は小人の器なり――66

知のあり方、ほんとうの頭の使い方とは？――72

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第4章　「子猫をどうするんだ」と問われて
未来に夢を託せるのか――84
山茂り川深く人安じるために――93
ともに生きるために価値転換――100
ものの見える人、見えない人――105
第5章　「日本ダメ論」の今昔・されど日本語の佳さ
日本人の顔、自分の顔をもっていますか――114
生命ある言葉の力――123
うん、生きているね。この言葉――131
第6章　「美しい型」は、なぜ必要なのか
「うん、そうそう」の出逢いの幸せ――140
文化の曲り角にたたずむ――145
趣味流儀の人が好き――152
自分の生き方に殉じた人――158

第7章　「見すえる」ことの強さ・悲しさ
〝おとなの話〟の本質――166
見えないものに視線を向ける――172
文化は気化して身につく――181
第8章　老いる・死ぬ・鎮める
飢えのなかにある真実――192
「今」が生である――195
時間に運ばれながら死という終着駅へ――202
いつ失ったか、花へのおそれ――208
黒い土をつくった歓び――216

ブックデザイン――久保和正

はしがき

これまで方々で書いたこと話したことを、まとめて本にしませんかとの有難いおすすめであったが、やはり、書きおろすことにした。

書き出してみると、かなり難儀な仕事で、なるほど〝年寄りのひや水〟という諺は本当なのだな、と感心する始末であった。それでも、どうにか書き終えたのは、ひとつの詩の一行のお蔭である。與謝野晶子の『君、死に給うことなかれ』は「ああ、弟よ、君を泣く」という一行で始まる。この「弟よ」を「日本よ」に置き換えて、現代と近未来を書くことが私を動かしていた。

ああ、日本よ、君を泣く
君、死に給うことなかれ

作業の計画表の片隅にこう書いて、夜のしらじら明けまで筆を進めた。青春時代、完全

軍装で長い道のりを行軍したとき、元気づけに軍歌を歌い続けた。歌いながら眠って、銃を担いだまま田ン圃に倒れ込む者もいた。そんな風景が、いま、老骨をおく書斎によみがえってきた。

「ああ、日本よ、君を泣く」は、私の文章行路の軍歌だった。

真下飛泉の『戦友』が軍歌にしてはあまりにもかなしいように、私の軍歌もかなしいのである。

この場合、「かなし」は「悲し」でもなければ「哀し」でもない。幸田露伴氏のいうように、「愛し」、「見ているのがつらい。居ても立ってもいられない」という心情である。「愛し」が「愛し」となった、という説をそのまま私は信じている。

かりに阪神大震災からと区切ってもよい。それ以来、日本には、醜いこと、意外なこと、呆れてモノも言えないこと、価値観が裏切られること、かてて加えて千遍一律の鈍感さ、エゴの集団に化したかと思わせる動き、声高にすぎる「日本ダメ論」とジャパン・バッシング等々、「どうなってしまうんだろうね、日本は」という言葉に集約されるような社会現象が後を絶たないでいる。

静岡市にお住まいの杉山次郎氏が堪えかねられたのか、次の一首を新聞の歌壇に投稿されていた。

こんなことだったのかと今日八十歳いまさらのごと夏雲に問う

八十歳ではなくても「同感」を口にする人が多いだろう。私もその一人である。しかし、私は知っている。

まさに、夏雲に問いながらも、黙々と自己の責任を果たし、人生行路を踏みはずすことなく、日本を底辺で支えている人の多いことを。そのモラルや心情あっての、日本である。その人たちが愛しいではないか。だから「ああ、日本よ、君を泣く」を本の題名にしようと、それはもう執念のようになっていた。

しかし、版元をはじめ周囲の人は「いまどき、與謝野晶子を知っている人は少ないでしょう」とか「感覚がすこし古すぎますね」とか言って、私を取り抑え、そういう題をつけないように、高手小手に縛り上げてしまったのである。これも、ご時勢だと思う。

「そんなこと言っても、いまの人にはわからないよ」が金科玉条となってしまい、「金科玉条って何ですか」と聞く〝今の人〟がいたら、「それを辞書でひいて自分の言葉にするのを人生というんだろうが」と教える先輩がいなくなった。

それで、先輩づらをして言うのではないが、手垢のついた発想・表現・会話・決断に自分をゆだねずに、むかしの人たちが生き・考え・感じ・悩んできた物語や言葉を栄養素と

して吸収しながら、せめて精神の領域では自立した人間になりましょうよ、という提案をこめて『知の荒野に立たぬために』というタイトルを、版元に我儘言って通してもらった。社長の下村のぶ子さんにも担当者の仲田てい子さんにも、改めてお礼を申さねばなるまい。

私事で恐縮だが、熱海の山村に住んでから、生きること・老いること・死ぬこと、それに都会に住むこと・文化が点滅すること等がよく見えるようになった。そのような私の「肉眼日記」も、織りまぜさせて頂いた。

平成八年十二月

草柳　大蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔第1章〕
自分で編んだ人生教科書

人生、もみじの如く

歩いたあとが花になる人

チェーホフに『私の大学』があるように、人それぞれに人生大学があって、それぞれに自分の教科書や人生読本を編んでいるようだ。

職業柄いろいろな人にお目にかかることができて、その人柄や考えや学識に心を動かされるたびに、その方の編んでこられた人生読本を、長い汽車の中で、あるいはゆっくりと走る客船の中で、最初の一頁から読んで聞かせていただきたい気持になる。しかし、ときには「こんなことがあったのですよ」と語られて、人が生きてゆくことの多様さ、その逆の相似形の連続におどろかされることもある。

その一人に、作家の幸田文さんがいた。「絵になる人」という表現があるが、幸田さんはお逢いするたびに、その時間と場所を「絵にしてしまう人」であった。

「道を歩く人、歩いたあとが道になる人」とは、私の敬愛する陶芸家河井寛次郎氏が好ん

で書いた言葉だが、中国の作家魯迅にも「歩いたあとが道になる人」という言葉があった。同時代人だから、仙台か京都でお二人が会って、置酒歓談の折に、意気投合してできたのかも知れないし、あるいは全く別々に同じことを考えついたのかも知れない。

さて、幸田さんは「歩いたあとが花」、あるいは「季節」になる人であった。対談を申し込んだら、「春ですもの、草餅でも食べながら致しましょうよ」とのご返事だったが、なにしろ日本芸術院会員でいらっしゃるから、隅田川の河畔の茶屋で縁台に腰掛けてというわけにもゆかず、築地の有明館という、障子のあけたての音さえ柔らかい割烹旅館をえらんだ。

旅館の方の配慮で部屋に桃が活けてあったが、その花明りの中を幸田さんはほんとうに草餅ご持参であらわれたのである。桃の花・草餅・着物、春がすっかり整ったところで、対談が始まり、父・幸田露伴氏の躾を受けた日々のことに話が及んだ。

文さんは次女だから昔風にいえば乙姫である。ちなみに長女は大姫というが、浦島太郎が龍宮城でもてなしを受けたのは乙姫で次女の方である。あのとき龍宮城の長女の方はどこへ行っていたのか、私はいまもって疑問に思っている。それはとにかく、大家の乙姫は身体の肌を磨けばいいのだが、文さんは父親に心の肌を磨かれたのだ。しかも、父の手に容赦はなかったことは、名作『あとみよそわか』等を読めば、こちらまで息苦しくなるほ

どである。しかし、容赦がなかったからといって、父の前で悲鳴をあげたり、ふくれたり、泣いたりすることは許されない。それなら、ついに一度も泣かなかったかといえばそれは嘘で、映画館に入って、その暗がりで涙をこぼしていた。

人生読本「巻の一」の筋目のわけ

映画がトーキーになる前の、活動弁士がセリフと語りを入れていた頃の話である。

貧しい生まれの、下積みの娘が上流階級の御曹司に見染められ、花嫁修業をする。その一齣（ひとこま）に西洋料理のフルコースを食べる順序を教わる場面があった。幸田さんは、もう何十年も昔のことであろうに、よほど忘れかねているとみえて、対談の中でその場面は流れるような口調になった。

「その御曹司が端（はた）から〝いちにとさん、さんころりん、ちんからほけきょのとんがらし〟って順序を教える。無声映画でしょ、活弁がそれをやるの。〝いちにとさん、さんころりん……〟。娘がお料理をその順で食べる。私、見ていて、ワーッと泣いちゃって。私もそうなのよ。いちにとさんなのよ。順序を間違えちゃいけないと思って、いちにとさんなの。おやじがそういう教え方なの」

おかげで、人生読本は「巻の一」から筋目の立ったものになったはずである。その読本

をそらんじて、リズム感のある、めりはりの効いた小説や随筆を書いた。たくさんの人に読まれもしたし、賞も受けた。名も定まった。それなのに、ぱっと机の前から離れて、働きに出た。なぜですか、あなたほど下町の人情や物腰をご存知のお人が、と率直にうかがった。

「血ですよ。幸田露伴の血からのがれたかった。なにを書いても〝幸田露伴・息女〟っていわれる。血がなんなのよ。露伴の娘に生まれたんだから露伴の血をうけたの、仕方がないじゃないですか」

取材？　そんなものではない。もっと、のっぴきならないものを、自分で求めたのである。つまり、人生読本の「巻二」からは自著である。

「よォし、それなら文筆のほかのことで生きましょって、ずいぶん探した。ないのね、日本には、女が中年から働くっていうところが」

まず犬屋にとび込んだ。犬の気持がすこしはわかるし、ご機嫌さえとっていりゃいい、と考えた。雇う方のことは考えなかった。女ですか、女じゃねぇと門前払い。つぎがパチンコ屋の住み込み店員。これも犬屋と同じ理由でお払い箱。三番目が中華料理店の皿洗い。採用されたが、体の発育のわるい女の人と同室で寝ることに堪えられなくて四日目でこちらから退散。やっと世話してくれる人が出て、置屋に拾ってもらったが、そこのおかみさ

んに「何様のお姫様がきたって、出てきた関係で使うからね」と言われた。四か月で腎臓を悪くして顔が青ぶくれになり、医者から「家に帰らなきゃ死にますよ」と告げられて、荷物をまとめることになった。

結局、とどのつまりは文筆稼業になったんですね、と問えば「だって仕方がないでしょう。ほかに食べてゆけるものがないんだから」と、微動だにせずに答えたものである。

木は着物をきている

『木』という著書がある。えぞ松から始まってポプラまで、木を尋ね、木に教えられ、木に涙するエッセイ十五篇が収まっている。読みすすむうちに、幸田さんが日本各地の森林に身体をおいていたことがわかる。巻末の初出誌一覧表をみると、最初の一篇「えぞ松の更新」が『学鐙』に掲載されたのは一九七一年一月号で、最後の「ポプラ」が一九八四年六月号だから、足かけ十四年をかけたといえる。

この書には、もはや「露伴の息女」は毛筋ほども感じられない。磨きあげた感性の庖丁が対象をすいすいとさばいて、ゆき届いた人生観の器にきれいに並べてくれる。ことに言葉の適切さは、ふだんマスメディアを通じて荒れに荒れてしまった言語表現の泥沼にいる私たちを、きれいな水でさっと洗ってくれる思いがする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com